

# 立松和平「海の命」の教材性の検討

—絵本『海のいのち』と『一人の海』を視野に入れた読みの構築—

中野 登志美

## 1 研究の目的

立松和平の「海の命（いのち）」は、1996年度から光村図書と東京書籍の小学校6年生の国語教科書に採用されている。光村図書・東京書籍はともに「海の命（いのち）」を国語の教科書に採録しているのだが、光村図書では「海の命」、東京書籍では「海のいのち」として作品のタイトルを表記している。もはや定番教材のひとつと考えられる「海の命」のクライマックスは次の場面である。（本稿では絵本版の『海のいのち』と区別するために、国語教科書は「海の命」として表記する）

これが自分の追い求めてきたまぼろしの魚、村一番のもぐり漁師だった父を破った瀬の主のかもしれない。（中略＝稿者）この魚をとらなければ、本当の一人前の漁師になれないのだと、太一は泣きそうになりながら思う。水の中で太一はふっとほほえみ、口から銀のあぶくを出した。もりの刃先を足の方にどけ、クエに向かってもう一度えがおを作った。「おとう、ここにおられたのですか。また会いに来ますから。」こう思うことによって、太一は瀬の主を殺さないで済んだのだ。大魚はこの海の命だと思えた。

「海の命」の読者は、父親を殺された少年が成長してかたきと対決するという神話的な復讐譚<sup>1</sup>を想定しつつ読み進める。だが、復讐譚だと想定しながら「海の命」を読み進めていた読者は、太一が敵討ちをしないクライマックスの場面に出会った時、この物語をどのように解釈してよいのか困惑するだろう。そのために「海の命」の授業では、クライマックスの場面で「なぜ太一は瀬の主のクエを殺さなかったのか」という点に主点を置いた実践が報告されている<sup>2</sup>。「海の命」のクライマックスは、渥美秀夫が指摘しているように、学習者にとっても教師にとっても読み方が困難な難所になっている<sup>3</sup>ために、授業ではクライマックスの場面の読みに重点が置かれている。「海の命」のクライマックスの場面は復讐譚の定式を破った作品構造になっていることで、物語を理解する枠組みとしての働きを担うスキーマが活用できず、この物語の読み方を困難にさせている。この物語の読みを困難にさせているのは、「海の命」が復讐譚の物語ではないためである。だが、ここに教材としての価値があるといえよう。

小学校の低学年・中学年・高学年における国語の教科書の系統性について、プロップの理論を援用して分析した住田勝とゼミの学生は「はじめに示される『加害あるいは欠如』から『不幸・欠如への解消』へと物語は進むが、途中（山場）で新しい価値が見出されることで、物語の筋道が変わるという特徴」がある。そして「新しい価値が前景化することにより、物語冒頭に設定された主人公の『生きる意味』が新しく前景化される価値のもと再構成される」<sup>4</sup>と指摘している。また、キャンベルの理論を援用した分析においても、小学校高学年における国語の教科書は「（主人公が）目的を否定する出来事にさし当たり、新たな価値づけがなされ」<sup>5</sup>という特性が見いだせることを指摘している。主人公の太一が瀬の主のクエを殺さない選択をするクライマックスの場面は、「海の

の命」が復讐譚の物語ではないことを表している。

そこで本稿では、復讐譚の物語ではないことを前提にして、学習者が物語スキーマを活用できない難解な「海の命」のクライマックスの場面は、小学校高学年における国語教科書の特性の「主人公は山場で『新たな価値』を見いだす」＝「主人公の『生きる意味』が前景化される」とどのように連関した教材的価値を有しているのかを考察する。その際、「海の命」の原典である絵本版『海のいのち』と『一人の海』を視野に入れながら、教材としての「海の命」の価値を明らかにしたい。

## 2 「海の命」の主題の考察

「海の命」の先行研究を大別すると、太一の父親や与吉じいさだけではなく、太一の行動や考え方に着目した「人間と自然の共生」の主題と、主人公の太一の一生に注目した「一人の人間の成長」の主題が提示されている<sup>6</sup>。「海の命」を「人間と自然の共生」と読む立場にあるのが渋谷孝である。渋谷は『『自然のめぐみ』に畏敬の念と感謝の念を持って接することを忘れた現代人への抗議になっていると読み取るのが『正しい読み方』である<sup>7</sup>ことを言及している。渋谷の見解は「海の命」の作者である立松和平が『海のいのち』を執筆した経緯を述べている「作者のことばー自然と付き合う極意」を参考にしている。立松和平は「作者のことばー自然と付き合う極意」の中で次のように述べている。

自然と向きあい、自然のめぐみにつねに感謝を忘れず、祈るような気持ちで生きている人の物語を書きたかった。それが我々の本来の生き方なのである。(中略＝稿者) 大切にしている漁場には、巻き網の船が一網打尽するためにやってくる。中には違反操業もあり、タイやイサキやブリをごっそりととって行くのだそう。漁師はこう語る。「この漁法やったら、千匹に一匹と思ってくださいねえ。この海の中に千匹おって、一匹しか釣らないこれが昔からの漁師の生き方なのである。そうすればずっとこの海で生きていける。それが与吉じいさの生き方なのであり、若い太一も人生哲学として学んだことなのだ。我々の祖先が長い時間かかってつちかってきた自然観である<sup>8</sup>。」  
(下線・引用者)

渋谷は、「千びきに一びきでいいんだ。千びきいるうち一びきをつれば、ずっとこの海で生きていける」という与吉じいさの考えや行動に漁師としての生き方や人生哲学が表出されているとして、「海の命」は「人間と自然の共生」を主題にした物語だと捉えている。

他方、「海の命」の主題を「一人の人間の成長」と捉えているのが村上呂里である。村上は、「海の命」のクライマックスで主人公の太一が瀬の主のクエを殺さない選択をするのは、「太一が『一人前の漁師』＝『村一番の漁師』になっていくというプロット」に必要であったと捉えている<sup>9</sup>。すなわち、光村図書の教師用指導書の編集委員が述べているように、「海の命」は視点の置き方によって「人間と自然の共生」という主題、あるいは「一人の人間の成長」という主題が描かれている物語だと読むことができる。しかしながら、このことに問題点があることを言及しているのが勝倉壽一である。勝倉は「この作品の《読みの難しさ》は、まさに教師用指導書に二つの主題として挙げられた二大要素－太一の人間的な成長と、人間と自然の共生という問題－がどのように関わり合い、一個の統一体としての文芸世界を構成し得ているかという問いに基づくものである」<sup>10</sup>と言及している。勝倉が言及しているように「一人の人間の成長」と「人間と自然の共生」という主題はそれぞれ分かれているのではなく、相関し合って「海の命」という物語世界を作り上げている。「一

人の人間の成長」と「人間と自然の共生」という主題に通底しているのが、「生命の大切さ」や「生命の継承」という観点である。

授業実践について目を向けると、自然の脅威に目を向けて「地球を守るには？」という課題に取り組んだことを報告した横山迦葉子の実践報告<sup>11</sup>や、「太一の生き方にせまる」ことを指導目標にして授業を展開した國野大樹の実践報告<sup>12</sup>がある。それぞれの授業実践は「海の命」の中で着目した主題が異なっているものの、「人間と自然の共生」という主題と「一人の人間の成長」という主題に通底する「生命の大切さ」や「生命の継承」を主眼点にした授業を展開し、一定の成果を挙げたことが報告されている。つまり、教師用指導書では「海の命」の授業を展開するにあたって、視点の置き方によって主題はそれぞれ解釈できることが提示されている。一方、「人間と自然の共生」と「一人の人間の成長」の二つの主題を分けずに、学習者たちの「海の命」の読みの反応を重んじた実践も行われている。例えば、羽場邦子の授業実践では、学習者たちがそれぞれ「海の命」の課題を出し合い、そこから学級全体で「与吉じいさの千びきに一びきでいいという言葉はどういう意味だろう。また、この言葉は太一にどういう関係があるのだろう。」等の共通課題を決めて、その共通課題を解決するための方法（読み）を学習者に考えさせている。最後に単元学習のまとめとして、「海の命とは何か」について学習者がそれぞれの読みを書いており、「自然界全てが命」・「海のめぐみ」に着目した記述や、太一が漁師として成長した姿を読み取った記述が報告されている<sup>13</sup>。

教師用指導書を含めた「海の命」の先行研究や授業実践の報告を管見する限り、「海の命」は「人間と自然の共生」と「一人の人間の成長」という主題が定着しているものの、「海の命」における「人間と自然の共生」および「一人の人間の成長」の内実がどのようなものであるのかは明らかにされていない。そこで本稿では、「海の命」の先行研究では「人間と自然の共生」および「一人の人間の成長」としか提示されていない主題をさらに一歩踏み込んで、二つの主題を相関しながら「海の命」のモチーフを考察する。

### 3 『一人の海』と「海の命」の比較

#### 3-1 もぐり漁師を志す太一の真意と与吉じいさを漁師の師として選んだ理由

「海の命」の原典は『一人の海』（集英社、1993年）であるとされている。『一人の海』では、主人公の太一をはじめとするすべての登場人物が九州地方（長崎県対馬）と思われる方言<sup>14</sup>を話している。『一人の海』は全52ページから成る作品であり、その骨子を残しつつ簡潔に纏めて、標準語に改稿したのが絵本版の『海のいのち』（集英社、1992年）である。出版年は絵本版の『海のいのち』の方が一年早いですが、『一人の海』→絵本版の『海のいのち』→教科書の「海の命」の順番で制作されたことが是認されている<sup>15</sup>。方言を交えた文章によって丹念に形作られた『一人の海』を簡潔に纏めたのが絵本版の『海のいのち』であるといえよう。教科書の「海の命」も絵本版の『海のいのち』と同様に『一人の海』を基にして簡潔に纏められた物語である。「海の命」のモチーフを考察するにあたって、原典である『一人の海』を参照することは「海の命」の読みを構築する上で手助けになるであろう。『一人の海』の詳細な分析はすでに昌子佳広の論考がある<sup>16</sup>ので、本稿は『一人の海』だけ表現されていて、大切なところだと思われる部分を中心に考察し、比較しながら教科書の「海の命」を論じていきたい。

太一が与吉じいさに頼んで漁師の弟子にしてもらうのは『一人の海』も「海の命」も同じであるが、教科書の「海の命」では、太一が与吉じいさを自分の師に選んだ理由について、「太一の父が死んだ瀬に、毎日一本づりに行っている漁師」としか説明されていない。しかし、『一人の海』では「与

吉爺さは太一の父親太助のように、ただひとつの漁法に生涯をかけてこだわりつづけてきたのである。」<sup>17</sup>とあり、単に与吉じいさが「太一の父が死んだ瀬に、毎日一本づりに行っている漁師」だったからではなく、太一の父親のように「ただひとつの漁法に生涯をかけてこだわりつづけてきた」漁師であったことも、太一が漁師の師として与吉じいさを選んでいった理由が記されている。子どもの頃から太一は父親と同じようにもぐり漁師になることを夢見ていたにもかかわらず、「飼い付け漁と呼ばれる釣り」をする与吉じいさを漁師の師として選んだのは、上記の理由の他に、父親が亡くなった瀬（『一人の海』では太助瀬と呼ばれている）は潮の流れが激しくて、漁師であっても容易に近づけないところであるのに与吉じいさは唯一往来できる漁師であること、そして父親が亡くなった瀬のことを村で最も熟知していた人物であっただけでなく、父親と同じように「ただひとつの漁法に生涯をかけてこだわりつづけてきた」与吉じいさに、太一は父親と似通った漁師としての生き方を見出したことが挙げられる。与吉じいさは、父親の死んだ瀬に潜り、もぐり漁師として自立することを志している太一にとって無双の師として形象されている。すなわち、『一人の海』には、太一が「無理やり」与吉じいさの弟子になったのは、いずれ父親が死んだ瀬に潜るために必要な舟舵の技術や海の知識を得るためであったことが詳しく書かれている。加えて、与吉じいさの漁師としての生き方や人生哲学を通して、父親の生き様とどこか重ね合わせている太一の姿が見受けられる。『一人の海』には、父親を殺した瀬の主のクエを仕留めたいためにもぐり漁師になることを志している太一の真意を通して、与吉じいさを漁師の師に選んだ理由が詳しく表現されている。

### 3-2 太一の「夢」

もぐり漁師になることを切望する太一の心情が強く表れた『一人の海』の中の場面である<sup>18</sup>。

太一は秘かな夢を育てていた。（中略＝稿者）太一が一人前の漁師として大きくなっていくにつれ、夢も具体的になってきた。父を殺したという瀬の主のクエを仕留めることだ。（中略＝稿者）太一はそのクエを仕留めるために漁師になったのだと、実際に海に潜るようになってから思うのだった。太一の夢の中では、そのクエは体長二メートル、重さは百五十キロはあった。緑色の目で潮の流れを眺めつづけている。父と出会ったと同じ場所で、闘って打ち破った男の息子がやってくるのを待っているのだ。そう夢想することで、太一には生きる力が湧いてきた。

敵を討つために漁師になった太一は、父を殺した瀬の主のクエを仕留めることを夢見て生きている。瀬の主のクエを仕留めることが太一の生きる力であった。教科書の「海の命」の中の「ぼくは漁師になる。おとうといっしょに海に出るんだ。」という太一の言葉には、父親の敵を討つために太一がもぐり漁師を志していることは示しているものの、教科書では瀬の主のクエを仕留めることが太一の「生きる力」になるほど強く待ち望んでいる気持ちは読み取りづらい。また、「海の命」には、太一がクエに遭遇した時に「追い求めているうちに、不意に夢は実現するものだ。」という文章があるが、太一の「夢」が唐突に表れているために、「夢」が具体的に何を指しているのか推測し難い。しかしながら、『一人の海』には、太一の「夢」は「父を殺したという瀬の主のクエを仕留めること」だと明確に書き示されている点で、太一の「夢」を通して、太一が漁師を志すようになる経緯や、もぐり漁師を志す太一の決意が把握しやすくなっている。太一は「夢」を実現させるために与吉じいさに弟子入りをする。その与吉じいさは「千びきに一びきでいいんだ。千びきいるうち一びきをつれば、ずっとこの海で生きていける」ことを人生哲学にした漁師であり、与吉じいさはその人生

哲学に基づいて生きている。与吉じいさの漁師としての生き方や人生哲学を表した言葉は『一人の海』では、「千匹に一匹でよかばい。」「千匹いるうちの一匹を釣れば、毎日漁にきてても減らんばい。永遠にこの海で生きていけるよ。」である。「千匹いるうちの一匹を釣」ることを信条にしていた与吉じいさは「毎日二十匹のタイを釣」った後、それ以上の魚を釣ることを止めて帰途に着く。この営みは、与吉じいさが漁師として「永遠にこの海で生き」るための行いであった。与吉じいさの漁師としての生き方や人生哲学が次第に太一に影響を与えるようになったことを示したのが『一人の海』の次の場面である<sup>19</sup>。

太一が与吉爺さに教わったのは、海を信じよということだったのかもしれない。心して向きあえば、海は必ず恵みをくれた。(中略＝稿者) 漁師は海とともに生きねばならないのだ。

ここには太一の心情が描き出されている。太一は父親が死んだ瀬に潜るために必要な舟舵の技術や海の知識を得たのみならず、与吉じいさの「千びきいるうち一びきをつれば、ずっとこの海で生きていける」という言葉に表象された〈海を信じること〉〈心して向きあえば、海は必ず恵みをくれること〉〈漁師は海とともに生きねばならない〉という漁師としての生き方や人生哲学を教わるのである。『一人の海』と教科書の「海の命」の物語内容に大きな隔たりは見当たらないけれども、『一人の海』には、与吉じいさの漁師としての生き方や人生哲学を表した数々の言葉があり、与吉じいさの生き方や人生哲学に影響を受けていく太一の姿から、「人間と自然の共生」の主題がより一層浮かび上がってくるのである。

#### 4 絵本版『海のいのち』と教科書「海の命」の比較

##### －「母は毎日見ている海は……」の一文の有無について－

絵本の『海のいのち』と教科書の「海の命」には、例えば「不漁の日が十日間つづいても、父はなにもかわらなかつた」(絵本版『海のいのち』)と「不漁の日が十日間続いても、父は少しも変わらなかつた」(教科書の「海の命」(光村図書))の「なにも」と「少しも」のような語句の相違がいくつか見られる。「なにも」や「少しも」のような語句の相違は、「海の命」の読みの構築にとりわけ大きな影響を与えていない<sup>20</sup>。そのために、本稿では語句レベルの相違ではなく、「海の命」の読者の読みに関わるような相違点について考察する。

光村図書の「海の命」には、「母が毎日見ている海は、いつしか太一にとっては自由な世界になっていた。」の一文が加えられている<sup>21</sup>。この一文は『一人の海』にも絵本の『海のいのち』にもない文章である。原典とされる『一人の海』と絵本の『海のいのち』にこの一文が存在しないにもかかわらず、光村図書の教科書の「海の命」に付け加えられている。この一文について、渋谷孝は「これは、今までに類を見ない事例である。」「本文に対する一つの解釈が『本文』として位置づけられたのである」<sup>22</sup>と指摘している。光村図書の編集委員がなぜこの一文を付け加えたのかは明らかにされていないが、渋谷の指摘にあるように「本文に対する一つの解釈」として教科書の「海の命」に付け加えたことが推測される。昌子佳広は絵本の『海のいのち』と比較して、「絵本版の『海のいのち』は、絵そのものが語っている部分・要素が大きい」ので「教科書編集の都合上割愛せざるを得なかつたその絵を補うために、問題の一文が加えられたのではないか」<sup>23</sup>と、絵本のメディア要素の特性の見地から指摘している。「海の命」のもともとの原典は『一人の海』であることを踏まえると、『一人の海』はページ数が多いので、教科書教材として作成する際に紙面を割愛せざるを

得なかつたいきさつがあつたことは想像に難くない。昌子が指摘するように、絵本にする際の制作の経緯は教科書教材の作成のいきさつにも当てはめて考えることが可能である。教科書教材として「海の命」を作成するにあたって、『一人の海』の物語世界の骨子は残したものの、教材として作成するために紙面を大幅に減少せざるを得なかつた。それゆえに教科書の「海の命」には唐突な表現が出てきて、読者が把握しづらい箇所が現れている。加えて、教科書では載せられる挿絵が制限される。絵本のように絵は載せられない。そのことを補うために光村図書の編集委員は「母が毎日見ている海は、いつしか太一にとっては自由な世界になっていた。」の一文を付け加えたのであろう。

では、光村図書の編集委員に付け加えられた「母が毎日見ている海は、いつしか太一にとっては自由な世界になっていた。」の一文は、読者にどのような解釈を促すのかを考えたい。光村図書の「海の命」で一文が付け加えられているのは、次のような文章の最後である。

ある日、母はこんなふうに言うのだった。「おまえが、おとうの死んだ瀬にもぐると、いつ言いだすかと思うと、私はおそろしくて夜もねむれないよ。おまえの心の中が見えるようで。」太一は、あらしさえもはね返す屈強な若者になっていたのだ。太一は、そのたくましい背中に、母の悲しみさえも背負おうとしていたのである。母が毎日見ている海は、いつしか太一にとっては自由な世界になっていた。 (下線・引用者)

太一を案じる母親の言葉について、勝倉壽一の「夫の仕事の危険さを知り尽くしていた妻の現実の重みと、夫を理想として憧れるわが子が夫と同じ末路を辿ることになるだろうことへの恐れ」<sup>24</sup>が表出されているという指摘がある。確かに、母親は夫がもぐった流れの激しい瀬でクエを仕留めようとする息子の心中を察して、息子が夫と同じ末路を辿ることを恐れている。母親の言葉は、母親は夫が絶命した瀬を禁忌の場所だと見做していることを示している。夫が絶命した禁忌の場所に潜ると、息子の太一も夫と同じように命を落とすことになるのではないかと心配して憂いている心境が表現されている。教科書の「太一は、そのたくましい背中に、母の悲しみさえも背負おうとしていた」という文章には、母親の心配や悲しみを受けとめながらも、自分の決意を曲げることのない太一の姿を読み取ることができる。しかし、「母が毎日見ている海は、いつしか太一にとっては自由な世界になっていた。」の一文が付け加えられたことによって、母親にとっては夫が絶命した瀬は禁忌の場所であるのだが、太一にとっては禁忌の場所ではなく「自由な世界」であることを読者に示すことになる。父親が絶命した瀬は、太一にとって「自由な世界になつ」ていることを表す一文は、父親を殺したクエを仕留めたいと敵討ちに執着して捕らわれていた、太一のクエに対する復讐心の解放を暗示している。したがって、「太一は、そのたくましい背中に、母の悲しみさえも背負おうとしていた」の一文は、太一がクエを殺さないことを選択するクライマックスの場面の伏線となっているのである。

## 5 「海の命」のクライマックス場面における教材性の考察

「母が毎日見ている海は、いつしか太一にとっては自由な世界になっていた。」の一文だけではなく、復讐譚の作品構造の定式を破ったクライマックスの場面から、「海の命」が復讐譚の物語ではないことは明らかである。前述したように、復讐譚だと想定しながら「海の命」を読み進めていき、太一が敵討ちをしないクライマックスの場面に出会った時、物語スキーマを活用できない読者はどのように解釈してよいのか困惑する。再掲になるが、読者が特に困惑するのは次の場面であろう。

この魚をとらなければ、本当の一人前の漁師になれないのだと、太一は泣きそうになりながら思う。水の中で太一はふっとほほえみ、口から銀のあぶくを出した。もりの刃先を足の方に向け、クエに向かってもう一度えがおを作った。「おとう、ここにおられたのですか。また会いに来ますから。」こう思うことによって、太一は瀬の主を殺さないで済んだのだ。大魚はこの海の命だと思えた。

太一が微笑んだクライマックスの場面について、山本欣司は「葛藤が消えて太一がほほえんだ時点で、大魚に対する認識は大きく転換していなければならない。いや、新しい認識を得たからこそ、葛藤が消えて、太一は微笑んだのである」<sup>25</sup>と指摘している。太一が得た「新しい認識」に関する山本の言及はないが、山本が指摘しているように、太一が「『新しい認識』を得た」クライマックスの場面は、まさに小学校高学年における国語教科書の特徴（「主人公は山場で『新たな価値』を見いだす」＝「主人公の『生きる意味』が前景化される」）に即応するところである。つまり、このクライマックスの場面で、太一は「新たな価値」＝「主人公の『生きる意味』」を見いだしたといえる。

では、クライマックスの場面で太一が見いだした「新たな価値」＝「主人公の『生きる意味』」とは一体何であるのか。太一にとっての「新たな価値」＝「主人公の『生きる意味』」の内実を考えていきたい。クライマックスの場面で看過できないのは、「この魚をとらなければ、本当の一人前の漁師になれない」と「泣きそうになりながら」もクエを殺さないことを選択した太一の変化である。太一は父親を殺したクエを仕留めることを夢見て、与吉じいさに弟子入りをした。それは生半可な決断ではなかったはずである。太一が父親を殺したクエを仕留めることに執着し続けたという物語内容を考慮すると、通常の復讐譚であれば、太一がクエを殺して父親の敵を討つことが物語の定式となる。だが、太一は「この魚をとらなければ、本当の一人前の漁師になれないのだ」と葛藤しながらも、父親の敵討ちをしない。ここに復讐譚の物語構造の破たんを確認できる。クライマックスの場面を詳細に見ると、追い求めてきたクエに遭遇した時に葛藤している太一の様子から、クエを殺すか殺さないかで思い巡らしている太一の心境が想像できる。光村図書の教科書に付け加えられた一文は伏線であることから、「そのたくましい背中に、母の悲しみさえも背負おうとしていた」時の太一は、まだ自分がクエを殺さない選択をするという自覚はなかったはずである。しかしながら、クエを殺すか殺さないか思い巡らした後、太一は「ふっとほほえ」んで「もう一度えがおを作る」。太一がクエを殺さないことを選択した時、クエに対する復讐心が消えて、これまでの執着心から解放される。太一が「ふっとほほえ」んだ時、葛藤を乗り越えて、「新しい認識」を得たのである。「新しい認識」とは、これまでの執着を捨て去って「新たな価値」を見いだしたことを指している。だからこそ、太一はクエを殺すことなく、クエに向かって微笑むことができたのである。太一にとっての「新たな価値」とは、父親を殺した敵討ちの対象としてのクエではなく、亡き父の映し身の対象としてクエを見做すことである。太一がクエを父親の映し身の対象として見做した要因に、与吉じいさの存在が大きく関係している。

与吉じいさは「千びきに一びきでいいんだ。千びきいるうち一びきをつれば、ずっとこの海で生きていける」ことを人生哲学にした漁師であり、その人生哲学に基づいて生きてきた。太一は、与吉じいさに父親と似通った漁師としての生き方を見いだしていた。父親と与吉じいさは「ただひとつの漁法に生涯をかけてこだわりつづけ」ることや人生哲学において似通った見識を持っている。しかし、自分の力を強く頼み、瀬の主すらもりを向けて挑んだ父親<sup>26</sup>に対して、「海を信じ」て「海とともに生き」ることを信条としていたのが与吉じいさであった。太一が瀬の主のクエを殺さ

なかったのは、「大魚はこの海の命だと思」ったことが起因している。すなわち、「海の命」というタイトルが表しているように〈瀬の主のクエの命〉＝〈海の命〉と太一が捉えたためである。「こう思うことによって太一は瀬の主を殺さないで済んだのだ。」の「こう」は、〈海の命〉を象徴する瀬の主のクエの命を奪ったら、海とともに生きることはできないと太一が考えたことを指している。

与吉じいさの漁師としての生き方や人生哲学を引き継ぎ、海とともに生きる選択をした太一の姿勢は「人間と自然の共生」という主題を示している。そして、〈海とともに生きる〉という「新たな価値」を見いだした太一は、父親の死を乗り越えて、父親の敵を討つことの執着心から解放され、「本当の一人前の漁師」として生きるアイデンティティを獲得するのである。葛藤を乗り越えて、海とともに生きる道を選び取ることで、太一は父親を死に至らせたクエに対する復讐心を解消させたのであった。新たな生きる意味を見いだした太一は、一人前の漁師のみならず人間としても成長したのである。「海の命」は、父親の敵討ちをしない選択をすることによって、〈海とともに生きる〉という新たな価値を見だし、そして「本当の一人前の漁師」から「村一番の漁師」になるまでの過程を通して、人間として成長する太一の生き様が語られている。

太一は村一番の漁師であり続けた。千びきに一びきしかとらないのだから、海のいのちは全く変わらない。巨大なクエを岩の穴で見かけたのにもりを打たなかったことは、もちろん太一は生涯だれにも話さなかった。

「海の命」は、三人称の形式がとられているものの、語り手は太一に寄り添いながら「村一番の漁師であり続けた」太一の生き様を語っている物語である。「本当の一人前の漁師」として生きる意味を見いだした時のことを、語り手は「もちろん太一は生涯だれにも話さなかった」と語っている。太一が自分の生き様を公言することはなかったのは、復讐心に終止符を打ち、葛藤を乗り越えて終結したことを話す必要はないと太一が考えたためかもしれない。かつてのクエへの復讐心は、太一の心の中で自己完結しているのであった。太一が自らの葛藤に対峙して解消する生き方は、読者にこれまでの概念にとらわれずに、違う角度から物事を見ることを意味を示唆している。

本稿では「人間と自然の共生」と「一人の人間の成長」の二つの主題を相関しながら「海の命」のモチーフを考察して、ひとつの読みを提示した。教科書の「海の命」の読みを提示するにあたって、原典の『一人の海』や絵本版の『海のいのち』を参照しながら構築したが、それはあくまでも割愛された部分を補うために過ぎない。教科書教材の「海の命」は自立した作品として成り立っている。「海の命」のクライマックスは、物語スキーマを活用できない難解な場面であるがゆえに、読者に多様な読みを生み出す物語である。だからこそ教材としての価値が認められるのである。

#### 【注】

1. 山本欣司「立松和平「海の命」を読む」(『日本文学』第54巻第9号、日本文学協会、2005年9月、p.54)
2. 羽場邦子「自分の考えをもちながら読むー第6学年 成長の姿を「海の命-」(『研究紀要』、広島大学東雲小学校、1998年3月)、二瓶弘行「読解・読書活動と表現活動の融合単元の構想ー単元『三つのいのち』(6年)ー」(『月刊国語教育研究』第339号、日本国語教育学会、2000年7月)、向川洋子「国語科の授業における「重ね読み」の試みー『やまなし』と『海の命』の実践を通してー」(『国語国文学』第42号、福井大学国語学会、2003年3月)、瀧田和也「「ことばの力」を育む文学教材のあり方ー「海の命」の実践の比較を通してー」(『言文』第56号、福島大学教育学部国語学国語学会、2008年)、高橋菜由「「読むこと」から「話すこと・聞くこと」へー『海の



- 命』の実践を手がかりにー」(『大谷大学国語教育研究』第3号、大谷大学国語教育学会、2016年)
3. 渥美秀夫「想像的実感からの構想ー「海の命」「故郷」「高瀬舟」における再読ー」(『愛媛国文と教育』第38号、愛媛大学教育学部国語国文学会、2005年12月、pp. 1-2)
  4. 住田勝ゼミナール「小学校物語教材における『共通構造』の分析の可能性ープロップとキャンベルの単一構造理論を用いてー」(『国語と教育』第39巻、大阪教育大学、2014年3月、p. 39)
  5. 注4に同じ(p. 40)住田勝ゼミナールによると、小学校低学年の国語教科書は物語の初めに示された問題を解決するという基本構造があること、そして中学年の国語教科書は低学年教材の基本構造を踏襲する形で展開しつつ、その結末部において問題が解決しないものや、新しい主人公のもとで再開始される構造になっている特性が見いだせることが指摘されている。
  6. 「海の命」(『小学校国語 学習指導書 6年生』、光村図書、2002年、p. 23)
  7. 渋谷孝「作者の主旨の考察と読み手のテキストの読み」(『文学の力×教材の力 小学校編 6年』、教育出版、2001年3月、p. 65)
  8. 立松和平「作者のことばー自然と付き合う極意」(渋谷が参照したのは『新編新しい国語 教師用指導書 研究編 六上』、東京書籍、1996年である。)本稿は注7(pp. 63-64)から引用している。
  9. 村上呂里「再考・教室で「読むこと」ー海人とともに読む「海のいのち」ー」(『日本文学』第66巻第3号、日本文学協会、2017年3月、p. 21)村上には原典の『一人の海』を参照しつつ、「海の命」を太一が一人前の漁師になる物語であると捉えている。
  10. 勝倉壽一「海の命(いのち)(光村図書・東京書籍 六年)の読み」(『東北文教大学・東北文教大学短期大学部紀要』第2号、東北文教大学・東北文教大学短期大学部、2012年3月、p. 4)
  11. 横山迦葉子「『重ね読み』『比較読み』を基盤にした価値生産を求める読書活動」(『教育科学国語教育』第520号、明治図書、1996年2月)
  12. 國野大樹「国語「海の命」の授業実践を通して見えてきたもの」(『考える子ども』第374号、社会科の初志をつらぬく会、2016年9月)
  13. 羽場邦子「自分の考えをもちながら読むー第6学年 成長の姿を「海の命-」」(『研究紀要』、広島大学東雲小学校、1998年3月)
  14. 作者の立松和平によると、長崎県対馬で取材した漁師をモデルにしたことが明かされている。東京書籍の教師用指導書に収録された「作者のことばー自然と付き合う極意」や、光村図書の教師用指導書に収録された「作者の言葉 海が育ててくれる」を参照されたい。
  15. 昌子佳広「教材『海の命(いのち)論(二)ー立松和平『一人の海』との比較をもとにー」(『国語教育論叢』第15号、島根大学教育学部国文学会、2006年3月、pp. 27-28)。昌子の他に河野順子も『一人の海』→絵本版の『海のいのち』→教科書の「海の命」の順番で制作されたことを想定している。(河野順子「立松和平「海の命」の授業実践史」、『文学の授業づくりハンドブック』第3巻、溪水社、2010年1月、pp. 89-90)
  16. 注15に同じ
  17. 立松和平『一人の海』(『鳴海星』、集英社、1993年、p. 74)
  18. 注17に同じ(p. 66)
  19. 注17に同じ(p. 83、p. 85)
  20. 絵本の『海のいのち』と教科書の「海の命」の比較については、注7の渋谷孝の論考と注15の昌子佳広の論考がある。
  21. 東京書籍の「海のいのち」にはこの一文は付け加えられていない。
  22. 注7に同じ(p. 66)
  23. 昌子佳広「教材『海の命(いのち)論(一)原典(絵本)『海のいのち』との比較をもとにー」(『国語教育論叢』第14号、島根大学教育学部国文学会、2005年3月)p. 220)
  24. 注10に同じ(p. 6)
  25. 注1に同じ(p. 57)
  26. 注1に同じ(p. 59)

(広島経済大学 非常勤講師)